

近世フランスにおける外国人の処遇をめぐる言説 —外国人遺産取得権を中心に—

みせ はるか
見瀬 悠

<https://researchmap.jp/harukamise>

はじめに

(1) 近世フランス王国と外国人

- ・外国人の好意的受入れと歓待の名声
 - 外国人は生前には大幅な自由を享受
 - 出入国、居住、婚姻、売買、動産・不動産取得、生前贈与
 - 王権は王国の発展に貢献しうる外国人を積極的に招き入れる
 - 大市の外国商人、芸術家、奢侈品製造の手工業者、傭兵や軍人、海軍技術者、先端工業の技術者・実業家、海上交易に従事する卸売業者など
 - 政治・宗教的避難者の受入れ
 - 「痛み苦しむ人々の避難場所 *asile des affligés*」(枢機卿リシュリュ 1610年)
 - 帰化(帰化認可状 *lettres de naturalité* の取得)も申請をほとんど拒否されない
 - Tobias Smollett, *Travels through France and Italy* (1766)
 - 「礼節 *politeness* と歓待 *hospitality* を誇るフランス」
- ・外国人の不利な地位
 - 遺言の自由なし、相続・被相続能力の制限
 - 外国人遺産取得権 *droit d'aubaine* : フランスで帰化せず、フランス生まれの子孫も残さずに死亡した外国人の財産を国王が取得する権能
 - 北フランス慣習法地域の領主権に由来(領外民が対象)
 - 14世紀初頭に外国人を対象とする国王の権能に 様々な免除特権の存在
 - 様々な制限や差別的措置
 - 官職・聖職禄の保有禁止、宣誓ギルドへの加入禁止、訴訟保証金の負担、民事でも身柄拘束、帰化後にフランスに居住しなければ帰化の破棄、募金活動の禁止、戦時における敵国出身者に対する国外退去令、王権による戦時の外国人特別課税など
- ・問題関心
 - 外国人の一連の差別法制は外国人に対するどのような観念にもとづいており、フランスの「歓待」や「礼節」というイメージといかんにして両立したのか

(2) 先行研究と問題提起

- ・外国人の活動の概観 : Mathorez(1919-21), Lequin(2006)
- ・法制史研究

- 外国人の法的地位：Demangeat(1844), Danjou(1939), D’Alteroche(2011)
 - 帰化認可状取得の法的手続きや効力：Boizet(1943), Dubost(1990)
 - 「国籍」や市民権の概念の生成：Vanel(1945), Wells(1995)
 - ・政治・社会史的研究
 - 外国人課税と王権の政策：Dubost & Sahlins(1999)
 - 外国人帰化の実践：Sahlins(2004)
 - 都市における外国人：François(1985), Bottin(1999), Sonkajärvi(2008), Augeron et als.(2010), Tranchant(2010), Cerutti(2012), 小山(2021)
 - 外国人監視：Dubost(2000), Blanc-Chaléard et als.(2001)
 - ・文化史的研究
 - 外国人イメージ、ステレオタイプ：Jessenne(1996), Dubost(1999), Bernez(2002)
 - 外国人嫌悪：Acom(1940), Yardeni(1966), Heller(2003), Rodier(2020)
 - ・個別の国民集団、外国人部隊、外国人聖職者、宮廷の外国人、外国人プロテスタント墓地 etc.
- 外国人差別法制は法制史研究において明らかにされ、他のアプローチの研究でも頻繁に言及されるが、その要因については説明されないか、政治・社会的文脈から簡潔に説明されるのみ。法的・政治的な理論の次元で、いかにして正当化されるのか？
- 17世紀後半以降、特に18世紀における哲学者らによる外国人遺産取得権批判はある程度明らかにされているが、外国人がフランスでどう扱われるべきかに関する規範的言説において、それはどのような変化を意味したのか？

(3) 課題とアプローチ

- ・旧体制期フランスにおいて、外国人に対する認識がどのような展開をとげたのかを明らかにすること。
- ・外国人遺産取得権に着目。外国人の法的地位の指標、外国人の処遇をめぐる議論では必ず言及される制度。著名な法学者や哲学者がその著作において、この制度をどのように擁護したり批判したりしたのかを分析する。

1. 「外国人」カテゴリーの形成

- ・14世紀初頭、王国の内／外での生まれにより「生来の住民 *naturels*」と「外国人 *étrangers*」を区別する考えがすでに存在 [Gunée]
- ・「外国人」がフランス生まれでない人というだけでなく、様々な無能力と否定的なイメージを付与された個人のカテゴリーとして確立するのは16世紀
- ・いかにして？

(1) 「生来のフランス人」と外国人の法的定義の明確化

- ・14世紀末以降、外国人 *étranger* は「オバン *aubain*」と一致、外国人遺産取得権

の対象。しかしどのような範疇の人びとが対象となるのかは不明瞭。

- ・ 16世紀に外国人遺産取得権の適用をめぐる裁判を通して、「生来のフランス人 naturels Français」（相続能力をもつ人々）の条件に関する判例の蓄積
 - 出生地主義：外国人からフランスで生まれた子はフランス人
 - 血統主義：フランス人の親から外国で生まれフランスに帰国したものはフランス人
 - 居住主義：出生地や血統に加えてフランスでの居住が原則
- ⇒「生来のフランス人」の属性をもつ人とそうでない人の境界線の形成、外国人を定義し分類することがより容易になる

(2) 外国人嫌悪の高まりと外国人差別法の拡大

- ・ 宗教戦争期（1562-1598年）、外国人にフランスの災厄の原因を帰する外国人嫌悪の風潮の高まり。気候風土論と各国民集団の性格学の流行の影響も。
 - ・ 主要な嫌悪の対象は時代状況によって変化
 - イタリア人：1560年代から1580年代半ばまで [Balsamo] [Heller]
イタリア人金融業者の「貪欲さ」。サン＝バルテルミの虐殺後、カトリーヌ・ド・メディシスは内に「毒」を秘めた「フィレンチェの淫婦」と罵られる
 - スペイン人：第二次旧教同盟（1585年）から宗教戦争終結まで [Yardeni]
反旧教同盟パンフレット、スペイン人は「残酷」「意地悪」「傲慢」「自惚れ」フランス人とは相いれない国民、フランスへの政治的介入への反対
 - ・ 改革派、「不満派」、ポリティーク派の間の言説の一致 [Jouanna]
 - 外国の「専制」から「フランスの自由」と「公共善」を守るために闘う「良きフランス人」という立場の表明と密接な連関
 - Jean Bacquet (1577)：外国人は一般的に移住先の王国や土地を破壊して台無しにする。疑わしい人々、心のなかに「何らかの毒」を隠し持っている。
 - ・ 外国人の王国での活動に対する制限の拡大（16世紀後半～17世紀初頭）
 - 経済活動の制限
 - 1563年王令、外国人の銀行業従事の条件に5年ごとの保証金15万リーヴルの支払いの義務付け、1579年に確認
 - 1565年、破産宣言の自由の剥奪
 - 社団や教会からの閉め出しの強化
 - 16世紀半ば以降宣誓ギルドへの加入の禁止
 - 1616年、官職の保有禁止が財務・高等法院司法官職から全官職に拡大
 - 1579年ブロワ王令、高位聖職禄からは帰化者も排除
 - ・ これらすべてが« droit d'aubaine »と呼ばれるようになる
 - Cardin Le Bret (1632)：droit d'aubaineの第一の効果は「この王国においてすべての外国人に三部会への参加や官職と聖職禄の保有を不可能にする」こと
 - 相続の制限は副次的 外国人差別の重心が法から政治へ移動
- ⇒外国人の否定的なイメージの形成と処遇の具体化

(3) 外国人の「生まれの瑕疵」

- ・外国人にはフランス人とは異なる性質が備わっているという考え
 - 外国人の性質の汚点や瑕疵
 - Jean Bacquet (1577): 「外国人の汚点 *macule de pérégrinité*」
個人の意味や王国での長期間の居住では消えない
 - Louis Le Caron (1601): 「外国人の瑕疵と障害 *tache et empêchement de pérégrinité*」
 - Henri François d'Aguesseau (1694): 「自然による欠損 *défaut de la nature*」「出自の欠陥 *vice de l'origine*」「出自の瑕疵 *tache de l'origine*」
 - Lefèvre de Laplanche (1764-65): 「外国人の地位の欠陥 *vice de l'aubaine*」
 - Jean-Baptiste Denisart (1766): 「外国人の欠陥 *vice de pérégrinité*」
 - 帰化認可状の取得は外国人の汚点や瑕疵を消し去る
 - 例外 Jean Papon (1578): 外国人の性質は世代を超えて継承される
外国人のフランス生まれの子孫にも外国人遺産取得権が適用可能
- ・「外国人」とフランス人の間に制度的な区別を設けることは必然視される
 - 「外国人」は超時間的な概念
 - 古典古代の都市国家とのアナロジー Jean Bodin (1576); Bacquet
外国人の区別が政治共同体の普遍的な要請であるかのように論じる
 - 外国人遺産取得権は外国人を区別する手段とする機能主義的解釈
 - Bacquet: 「導入」の第一の理由は「王国に生まれたものと、そうではないが王国に住みに来たものを知り、両者のあいだに差異を設けるため」
※歴史的に正しくない。外国人遺産取得権は元来は慣習法、領主が領外民に対して有した支配権。外国人の地位に固有の制度となったのは結果。
パリ高等法院首席検事 La Guesle (1597): フランス人と有益な外国人にのみ王国の財を割り当て、フランス人の国外流出を防ぐ制度

⇒判例の蓄積と外国人差別法の拡大によるカテゴリーとしての明確化、否定的なイメージとの結びつき、非歴史的で本質主義的な「外国人」の観念

2. 外国人排除は「自然」である

- ・外国人をフランス人の様々な特典から排除することは当然のことと。どのような法的・政治的理論によって正当化されたのか？
- ・王権はどのような論理にもとづいて外国人の受入れを行っていたのか？

(1) 王国の「自然的調和」

- ・生来の住民と王国や国王と結ぶ生まれによる繋がりという考え方
→外国人はこれをもたないため、疑わしく、潜在的な害悪
Papon: 「ひとは〔自分の生まれ故郷への〕穏やかな愛着によって故郷にとどめ置かれて」いるため、故郷を離れ他所に移住するのは「奇妙」

「神の法によっても人間の法によっても、外国人は恐れ疑うべきものである。とりわけ、王国の秘密の忠実な保存もしくは裏切りによる宣言に関しては、そうである。そして、外国人は決して元来の住民と同じくらい忠実であることはないだろう。元来の住民は常に自らの祖国の安寧に友情、熱意、配慮をもち、裏切るよりもむしろ苦しむことを望むだろう。こうしたことは、外国人には期待も希望もできない」

- ・「土着性」と政治的忠誠のあいだの強い連関が想定されている
 - e.g. イタリア貴族コンチーノ・コンチーニへの批判 [Dubost]
 - パリ高等法院の1615年5月21日の建白書：「生来のフランス人」のような「陛下の国家の保存に生来的／自然な愛着と興味」をもたない外国人を要職に任命することに反対、「王国の要所と陛下の国家の安全」を外国人に任せていると国境の諸州が外国に奪われてしまうかもしれないと主張
 - ・中世末期から継承される王国の一体性の理念の影響
 - 百年戦争期、フランス国王と臣民を繋ぐ「自然の絆」[Krynem]
 - フランス国王の統治は正統、外国の支配は「不自然」、イングランド人は「生来の敵」、「生来の国」フランスの防衛は「自然な君主」フランス国王に「生来の忠誠」をもつフランス人の「自然」な義務とする愛国的な言説の形成
 - ・トマス主義の長期的な影響
 - アリストテレスの目的論的自然観と神の恩寵の融合 [Villey]
 - 「自然」は善、調和的で合目的で、かつ神の計画に適っている
 - 王国の一体性を実現する「自然的調和」は適切、あるべき姿、反対に外国人はこの調和の外部に位置する不自然な存在
- ⇒外国人差別法は「自然」に適っている

(2) 「フランス法」の形成

- ・フランス王国の自立的な民法の観念、16世紀後半に人文主義や国民意識の高まりのなかで形成される [Thireau]
 - 慣習法や国王立法をフランスに適した法体系とみなす
- ・ヨーロッパの「普通法」と考えられてきたローマ法の権威の相対化
 - 実定法主義 *positivisme*
 - 主権の排他的保持者である国家が発布した法のみ強制力を認める
 - 国王立法の増加、慣習法の「国王法」化で進行した「法の国家化」の一表現
 - ガリカニズムを支持する高等法院の司法官や弁護士の支持
 - ローマ法の権威の基礎である「合理性」への疑問
 - 「ユスティニアヌス法典」の批判的研究、内在的矛盾の存在
 - 超越的な「普通法」の概念の拒否 法の歴史的・地理的な相対化
 - ローマ法は「ローマ人の法」、フランス人には必ずしも適していない
- ・フランス人の「生得的気質 *naturel*」(Bodin) に合致する法が「フランス法」
 - 国王立法、諸地域慣習法、ローマ法の一般原則、高等法院規律裁決
 - 諸地域慣習法の比較研究や補完作業を通じて「普通慣習法」の教説の形成

地域的多様性を超えて王国の法的一体性を実現する「フランス法」の概念
 Antoine Loisel, *Institutes coutumières* (1607) 外国人遺産取得権も含む
 ⇒法の国家化・国民化の動き、内容と無関係にフランスに古くから存在する法や
 国王立法に正統性を付与

(3) 王権の外国人受入れの論理

- ・外国人の受入れはフランス国王が代々継承する「伝統」
 - 国王は「先代の国王たちにならって」外国人に帰化認可状を授与
 - Claude Joly (1652): 王国は「あらゆるひとびと、特に外国人に対する穏和、礼節、正義、公明によって世界のあらゆる国民に知られて」おり、「早くもシャルルマーニュの時代からその卓越した証拠が存在する」
- ・政治的・宗教的な避難者の受入れ [Dubost]
 - Antoine de Montchrestien (1615): フランスは「自由の真の住処」
 - アイルランド人聖職者の帰化認可状: 敬虔なカトリックのための「避難場所」
- ・王権の言説において、外国人の受入れはフランス君主制の卓越性の例証
 - 1587年9月王令、外国人銀行家、商人、仲買人に対する特別課税
 「先代の国王たちが臣民のみならずあらゆる外国人に与えた、王国で安全に住み取引と商売をする自由のために、この王国はあらゆる君主国のあいだで偉大で壮麗とみなされてきた」
 納税と引き替えに取引の自由を保障、外国人への「恩恵 *grâce*」「寵愛 *faveur*」
 =外国人は本来はこうした荣誉にふさわしくないため、好意的な処遇は国王の特別な恩恵や寛大さの表明
- ・王国での外国人の処遇はフランス法の優越を賞賛する材料
 Bodin: フランスでは「外国人遺産取得権は抑制されている」ため、「外国人がギリシア、ローマ、東方全域において受けていたよりもはるかに好意的な処遇をフランスで受けている」
 Papon: 外国人が「捕虜、敵、奴隷」とみなされていた「ローマ人の法」に比べれば、フランスの外国人遺産取得権は「穏和で公的な規定」によって緩和されている

⇒フランス王国の「自然の絆」に組み込まれていない外国人を排除する制度は自然の理に適っているうえに、フランス人の「生得的気質」にも合致しているため、外国人に対する好意的処遇は特別な恩恵の表明に分類される

3. 外国人の「権利」へ

- ・近世ヨーロッパの海外進出、キリスト教世界観の限界と新しい人間社会の理念の必要性→人間固有の理性的な本性の認識に立脚する近世の自然法思想
- ・外国人遺産取得権の批判の理論的な基礎
- ・外国人の処遇に関する規範的な考え方にどのような変化が生じたのか?

(1) 外国人遺産取得権の批判のはじまり

- ・所有権の観点から
 - Hugo Grotius (1625): 所有権は自然法、財産を譲渡する自由も自然法であり、その一手段である遺言する権利も所有権と結びついている
 - 「外国人に遺言をすることを許さない」規定は「外国人が敵扱いされていた時代に由来」し、「より文明化された諸国民においては理性をもって廃止されている」
- ・外国人遺産取得権をめぐる問題が国内の実定法の領域にとどまらず、自然法や国際法の領域にまたがるものになる
 - Christian Wolff や Emer de Vattel ら後世の自然法・国際法学者の著作にも
 - 王国を個人の自由と能力を決定する基準とする考え方への根本的な批判
- ・17世紀半ば以降、自然法・国際法に関する著作以外でも、外国人遺産取得権が「歓待 *hospitalité*」に反するという見解
 - François de La Mothe Le Vayer (1643): *aubaine*[*aubaine*]の語源は Albion、この制度を表す言葉がフランスにもともとなかったことは「フランス人の歓待」を示している（外国人遺産取得権と歓待の矛盾、フランスに内在的ではない）
 - *Dictionnaire de Trévoux* (1704): 「歓待と自然的自由」に反する「憎悪法」
 - *Dissertation sur le droit d'aubaine* (1706): 旅行者への外国人遺産取得権の適用は「フランスが他の諸国民を凌駕している」外国人への「歓待」に反する

(2) 外国人遺産取得権の批判の普及

- ・本格的になるのは18世紀半ば頃から
 - Montesquieu (1748): 西ゴート族によるローマ帝国侵入の際に導入された「非常識 *insensé*」な法、商業や諸国民の交流への悪影響
 - 『百科全書』第6巻(1756): 商業が世界を繋ぎ慈愛が諸国民に広まる今日において、外国人の自由な訪れや定着が国家の繁栄を促進、外国人に遺言や財産の自由な処分を許さない法は「外国人がほぼ敵とみなされていた野蛮な時代の名残」とみなされるべき
 - Jean-Baptiste Moheau (1778): 外国人遺産取得権は王国の人口増加を妨げる「非常に未開で野蛮で不条理な法」
- ・批判の根底にある「有用性 *utilité*」の観念
 - 伝統主義や国民主義の観点からはもはや正当化できない、制度の価値の判断は国家の繁栄や人類の幸福にとって有益であるかどうか
 - Grimm (1764): 大法官ダゲンは「野蛮でフランスにとって有害な」外国人遺産取得権が「王権の最も古い法」という理由でその廃止案に反対したことから、「開明的でないレジスト」という評価
- ・「慈愛 *humanité*」にも立脚
 - 他者の痛みを思い、奴隷制、迷信、悪徳、不幸の廃止を望み、隣人のために人を善行へと駆り立てる「高貴で崇高な情熱」（『百科全書』第8巻）

- 外国人遺産取得権は「無慈悲 inhumain」
Vattel (1758) : 「これほど賢明な人々〔ローマ人〕がこれほど無慈悲な法を保持したのは、報復措置の必要から」
Jean-Baptiste-Antoine Suard (1774) : 「慈愛」を国民間の憎悪や戦争と対置、外国人遺産取得権は「諸国民を侮辱する」「野蛮な法」、急いで失効させて恥辱を消し去るべき
⇒外国人は王国にとって有益な人材や労働力であるだけでなく、共感や慈愛の感情をもって接すべき隣人
- ・外国人に対する処遇が文明の指標という考え方は持続
 - Voltaire (1756) : 外国人遺産取得権は東洋にはないがヨーロッパに残存する「野蛮」な慣習の一例
 - Vattel (1758) : 外国人を快く迎え入れ、礼儀をもって接することは「洗練された国民にふさわしい」
⇒外国人遺産取得権は外国人の「歓待」や国家の文明性と明らかに矛盾
- ・フランスを風刺するための材料にもなる
 - Laurence Sterne (1768) : 「午後三時には私はまぎれもなくフランスで食卓に着き、鶏肉のフリカッセを食べていました。もしあの晩私が消化不良で死んだとしても、世界中の誰も外国人遺産取得権の効力を停止できなかったでしょう。私のシャツ、黒い絹のズボン、旅行カバン、あらゆるものがフランス王に召し上げられていたでしょう。[中略] ああ陛下！これはあんまりです。それに私が説得申し上げなければならないのが、非常に洗練されていて礼儀正しく、情趣と繊細な感情で名高い国民の君主であらせられるとは、なんとも嘆かわしいことです。」…外国人遺産取得権の不条理と不寛容、フランスの自己イメージとの乖離
 - Johann Pezzl (1783) : 「いともキリスト教的な」法典から引き出された「オベーン」権 *droit d'aubaine* だと！それでも、『法の精神』を生み出したのはこの国民なのだ。なんということだ！モンテスキュも、あの偉大な哲学者〔ヴォルテール〕も、『人間の友〕〔ミラボー〕も、彼らの国で死の床にある哀れな外国人が国王の名のもとに横領され身ぐるみをはがされる前に死ぬるようになるほどには、同胞の精神に対して十分な影響力を発揮しなかったのだろうか。[中略] 私が思うに、このオベーンは「黒人法典」から、あるいは「アルジェ」の法から、もしくは「いともタタールのな」法典から引き出されたものだ。」…外国人遺産取得権がいかにキリスト教的慈愛や啓蒙哲学の理想とかけ離れ、いかにフランスとヨーロッパにふさわしくないか
⇒外国人の相続権の尊重や好意的処遇は規範的言説としてある程度定着、フランス文明批判のひとつのトポス

(3) 外国人遺産取得権の廃止への動き

- ・外国人遺産取得権をイングランド起源とする俗説が提起される
 - François de Paule Lagarde (1754) : 「エドワード3世による外国人の不動産相続

禁止」への報復

- Bosquet (1762)が全面的に採用、Laplanche と Denisart が紹介
- 倫理的に正当化できない制度の責任を外国に押し付ける言説。国王主権や王領権の擁護者においても、外国人の処遇をめぐる啓蒙期の規範的言説を無視できない
- ・王政のなかにも商業を阻害する外国人遺産取得権の廃止を求める動き
 - 財務総監セシェル (任 1754-56)、外国人遺産取得権の効力を停止する方が王国の利益につながる
 - 財務総監テュルゴ (任 1774-76)、外国人遺産取得権は有能で勤勉な外国人、有益な資本家や卸売業者を王国から遠ざけるため、国家と財政のためには廃止すべき
 - ネッケル『フランス財政論』(1784)：外国人がフランスに来て消費しフランスの産品を購入することを阻害するのはすべて不合理。「外国人遺産取得権はそれによって財産を奪われる外国人にとってよりも、それを実践する国民にとって有害」

1780年初頭、モルパ伯に外国人遺産取得権廃止の王令も草稿を提出

「フランスの習俗と相反し、開明的な統治の諸原則に反し、今日にはもはや適用できないと思われる法の欠点を完全に消し去ることが、余の正義と歓待の気持ちにふさわしいと考えた。実際、余の王領に時折舞い込むこれらのばらばらの相続を、あらゆる方面から支援し国内に引き入れることが非常に重要な資本、消費、産業の循環と比較することなどできるだろうか？」

⇒実際には廃止に至らなかったが、啓蒙の規範的言説が外国人遺産取得権の擁護者や王政内部にも入り込んでいた

⇒外国人の相続能力は生来の住民に固有の特典ではなく人間に共通の権利と捉えられ、外国人遺産取得権に免除規定があろうとなかろうと、制度自体が「歓待」に反するとみなされた。外国人は潜在的な害悪ではなく国家の富と繁栄、人類の幸福の源であり、慈愛を寄せ好意的に扱うべき隣人。国家の文明性をはかる指標。

おわりに

- ・近世前半には、外国人は「生まれの瑕疵」をもちフランス人とは本質的に異なるとみなされたため、外国人遺産取得権に代表される外国人差別法は自然の秩序やフランス人の気質に合致しており、王国の文明性と矛盾しないと考えられた。しかし自然法思想や、啓蒙の商業コスモポリタニズムや有益性、慈愛の理念の発展のなかで、外国人は王朝や国王の利益ではなく国家の繁栄や人類の平和と幸福の実現という観点から好意的に扱うべきと考えられるようになった。
- ・外国人の問題は国家の実定法の領域（国王主権の及ぶ範囲）と自然法や国際法の領域に属し、外国人の処遇に関する規範的言説の変化はこのふたつの領域の境界線の変化を反映している。

参考文献目録

○史料

- BACQUET Jean, *Œuvres de Maître Jean Bacquet*, 2 vol., Lyon, chez les frères Duplain, 1744.
- BODIN Jean, *Les Six livres de la République*, Paris, Jacques Du Puis, 1576.
- BOSQUET, *Dictionnaire raisonné des domaines et droits domaniaux ; des droits d'échanges, & de ceux de contrôle des actes de notaires & sous-signatures privées...*, 3 vol., Rouen, J.-J. Le Boullenger, 1762.
- CHOPPIN René, *Œuvres de M^e. René Choppin*, 5 vol., Paris, chez Guillaume de Luyne, 1662, t. II. *Traité du domaine de la couronne de France.*
- Correspondance littéraire, philosophique et critique de Grimm, Diderot, Raynal, Meistre, etc. [...]*, notices, notes, table générale par Maurice Tourneux, 16 vol., Paris, Garnier frères, 1877-1882.
- D'AGUESSEAU Heanri-François, *Œuvres de M. le Chancelier d'Aguesseau*, 13 vol., Paris, les libraires associés, 1759-1789.
- DENISART Jean-Baptiste, *Collection de décisions nouvelles et de notions relatives à la jurisprudence actuelle*, Paris, Desaint, 5^e éd. (5 vol., 1766-1771) et 8^e éd. (9 vol., 1783-1790).
- DIDEROT Denis et D'ALEMBERT Jean le Rond (dir.), *Encyclopédie, ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et métiers*, 17 vol., Paris, 1751-1780.
- GAMA Emmanuel de, *Dissertation sur le droit d'aubaine*, Paris, chez Charles Moette et Claude Saugrain, 1706.
- GROTIUS Hugo, *Le droit de la guerre et de la paix* (1625), traduit par Paul PRADIER-FODÉRÉ, édité par Denis ALLAND et Simone GOYARD-FABRE, Paris, PUF, 1999
- PAULE LAGARDE François de, *Traité historique de la souveraineté du roi, et des droits en dépendants* (1754), 2 vol., Paris, Rozet, 1767.
- LA MOTHE LE VAYER François de, *Opuscules, ou Petits traictez*, Paris, A. de Sommaville, 1643.
- LE BRET Cardin, *De la souveraineté du Roi*, Paris, chez Toussaints du Bray, 1632.
- LE CARON Louis, *Responses ou décisions du droict françois*, Paris, chez Nicolas du Fossé, 1605.
- LEFEVRE DE LA PLANCHE, *Mémoires sur les matières domaniales ou Traité du Domaine*, 3 vol., Paris, Desaint & Saillant, 1764-1765.
- LOISEL Antoine, *Institutes coutumières*, Paris, chez Abel L'Angelier, 1607.
- MOHEAU Jean-Baptiste, *Recherches et considérations sur la population de la France*, Paris, chez Moutard, 1778.
- MONTESQUIEU Charles de Secondat de, *De l'esprit des lois, nouvelle édition, revue, corrigée, et considérablement augmentée par l'auteur*, Londres, 1757.
- MONTCHRESTIEN Antoine de, *Traicté de l'æconomie politique. L'économie politique patronale, dédié en 1615 au roy et à la reyne mère du roy*, introduction et notes de Théophile Funck-Brentano, Genève, Slatkine, 1970.
- NECKER Jacques, *De l'administration des finances de la France*, 3 vol., 1784.
- PAPON Jean, *Secrets du troisième et dernier notaire*, Lyon, J. de Tournes, 1578.

- PEZZL Johann et WINKOPP Peter Adolf, *Faustin, ou le siècle philosophique*, traduit par D. de Longrais, Amsterdam, 1784.
- SMOLLETT Tobias, *Travels through France and Italy*, with an introduction by Thomas Seccombe, London-New York-Toronto, Oxford University Press, 1907.
- STERNE Laurence, *A Sentimental Journey through France and Italy*, 2^e éd., London, 1768.
- SUARD Jean-Baptiste-Antoine, *Discours prononcés dans l'Académie française, le jeudi IV août 1774 à la réception de M. Suard*, Paris, Demonville, 1774.
- TURGOT Anne Robert Jacques, *Œuvres de Turgot. Nouvelle édition classée par ordre de matières avec les notes de Dupont de Nemours augmentée de lettres inédites, des questions sur le commerce, et d'observations et de notes nouvelles, par MM. Eugène Daire et Hippolyte Dussard et précédée d'une notice par Eugène Daire*, 2 vol., Paris, Guillaumin, 1844.
- VATTEL Emer de, *Le droit des gens ou Principes de la loi naturelle appliqués à la conduite et aux affaires des nations et des souverains*, 2 vol., Londres, 1758.
- VOLTAIRE, *œuvres de Voltaire avec préfaces, avertissements, notes etc. par M. Beuchot*, t. XVIII, *Essai sur les mœurs et l'esprit des nations*, t. IV, Paris, chez Lefèvre 1829.

○研究文献

- ACOMB Frances, *Anglophobia in France, 1763-1789. An Essay in the History of Constitutionalism and Nationalism*, Durham, Duke University Press, 1940.
- AUGERON Mickaël et EVEN Pascal (dir.), *Les Étrangers dans les villes-ports atlantiques. Expériences françaises et allemandes XVI^e-XIX^e siècle*, Paris, Les Indes savantes, 2010.
- BALSAMO Jean, « Les lieux communs de l'italophobie en France à la fin du XVI^e siècle », dans *Les Grandes Peurs. 2. L'Autre. Colloque de Nancy (30 septembre – 3 octobre 2003) organisé par l'ADIREL*, Genève, Droz, 2004, p. 273-287.
- BELISSA Marc, *Fraternité universelle et intérêt national (1713-1795). Les cosmopolitiques du droit des gens*, Paris, Kimé, 1998.
- BERNEZ Marie-Odile (textes réunis et présentés par), *Visions de l'étranger au siècle des Lumières*, Dijon, Editions universitaires de Dijon, 2002.
- BLANC-CHALÉARD Marie-Claude, DOUKI Caroline, DYONET Nicole et MILLIOT Vincent (éd.), *Police et migrants. France 1667-1939*, Rennes, PUR, 2001.
- BOIZET Jacques, *Les lettres de naturalité sous l'Ancien Régime*, Paris, Maurice Lavigne, 1943.
- BONOLAS Philippe, « La question des étrangers à la fin du XVI^e et au début du XVII^e siècle », *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, t. 36, 1989, p. 304-317.
- BOTTIN Jacques et CALABI Donatella (dir.), *Les étrangers dans la ville. Minorités et espace urbain du bas Moyen Âge à l'époque moderne*, Paris, Maison des sciences de l'homme, 1999.
- CERUTTI Simona, *Étrangers. Étude d'une condition d'incertitude dans une société d'Ancien Régime*, Montrouge, Bayard, 2012.
- D'ALTEROCHE Bernard, *De l'étranger à la seigneurie à l'étranger au royaume XI^e-XV^e siècle*, Paris, L.G.D.J, 2002.

- DANJOU Colette, *La Condition civile de l'étranger dans les trois derniers siècles de la monarchie*, Paris, Sirey, 1939.
- DEMANGEAT Charles, *Histoire de la condition civile des étrangers dans l'ancien et le nouveau droit*, Paris, 1844.
- DUBOST Jean-François, « Significations de la lettre de naturalité dans la France des XVI^e et XVII^e siècles », *EUI Working Paper in History*, n° 90/3, Badia Fiesolana, San Domenico di Fiesole, 1990, p. 1-37.
- DUBOST Jean-François, *La France italienne. XVI^e-XVII^e siècle*, Paris, Aubier, 1997.
- DUBOST Jean-François, « Les stéréotypes nationaux à l'époque moderne (vers 1500 - vers 1800) », *Mélanges de l'École française de Rome, Italie et Méditerranée*, vol. 111, n° 2, 1999, p. 667-682.
- DUBOST Jean-François, « Les étrangers à Paris au siècle des Lumières », dans Daniel Roche (dir.), *La ville promise. Mobilité et accueil à Paris (fin XVII^e-début XIX^e siècle)*, Paris, Fayard, 2000, p. 221-288.
- DUBOST Jean-François, « Rendre compte d'un assassinat politique : la mort du maréchal d'Ancre ou l'inversion dans l'ordre des raisons », *Dix-septième siècle*, n° 276, 2017, p. 399-428.
- DUBOST Jean-François et SAHLINS Peter, *Et si on faisait payer les étrangers ? Louis XIV, les immigrés et quelques autres*, Paris, Flammarion, 1999.
- FRANÇOIS Etienne (dir.), *Immigration et société urbaine en Europe occidentale (XVI^e siècle-XX^e siècle)*, Paris, Éditions Recherche sur les civilisations, 1985.
- GUENÉE Bernard, « État et nation en France au Moyen Âge », *Revue historique*, t. 237, fasc. 1, 1967, p. 17-30.
- HELLER Henry, *Anti-Italianism in Sixteenth-Century France*, Toronto, University of Toronto Press, 2003.
- JESSENNE Jean-Pierre (éd.), *L'image de l'Autre dans l'Europe du nord-ouest à travers l'histoire*, Villeneuve d'Ascq, Université de Lille III, n° 14, 1996.
- JOUANNA Arlette, « Être "bon Français" au temps des guerres de Religion : du citoyen au sujet », dans Ouzi Elyada et Jacques Le Brun (dir.), *Conflits politiques, controverses religieuses. Essais d'histoire européenne aux 16^e-18^e siècles*, Paris, EHESS, 2002, p. 20-32.
- KRYNEN Jacques, *L'empire du roi. Idées et croyances politiques en France, XIII^e-XV^e siècle*, Paris, Gallimard, 1993.
- LEQUIN Yves (dir.), *Histoire des étrangers et de l'immigration en France*, Paris, Larousse, 2006.
- LESTRINGANT Frank, « Europe et théorie des climats dans la seconde moitié du XVI^e siècle », dans *La conscience européenne au XV^e et au XVI^e siècle*. Actes du Colloque international organisé à l'École Normale Supérieure de Jeunes Filles (30 septembre – 3 octobre 1980), Paris, E.N.S.J.F., 1982, p. 206-226.
- MATHOREZ Jules, *Les étrangers en France sous l'Ancien Régime. Histoire de la formation de la population française*, 2 vol., Paris, Champion, 1919-1921.
- MOREAU-REIBEL Jean, *Jean Bodin et le droit public comparé dans ses rapports avec la philosophie de l'histoire*, Paris, J. Vrin, 1933.

- PIANO-MORTARI Vincenzo, « Problème des États de la Renaissance », dans André Stegmann (dir.), *Pouvoir et institutions en Europe au XVI^e siècle*, Paris, J. Vrin, 1987, p. 7-13.
- PLASMAN-LABRUNE Irène, *État, Églises, étrangers. Favoriser, contrôler et exclure dans la France du premier âge moderne (XV^e-XVII^e siècle)*, thèse de doctorat soutenue à l'Université Paris-Est Créteil le 28 novembre 2015.
- ROCHE Daniel, *La France des Lumières*, Paris, Fayard, 1993.
- RODIER Yann, *Les raisons de la haine. Histoire d'une passion dans la France du premier XVII^e siècle (1610-1659)*, Seyssel, Champ Vallon, 2020.
- SAHLINS Peter, *Unnaturally French. Foreign Citizens in the Old Regime and after*, Ithaca-London, Cornell University Press, 2004.
- SONKAJÄRVI Hanna, *Qu'est-ce qu'un étranger ? Frontières et identifications à Strasbourg, 1681-1789*, Strasbourg, Presses universitaires de Strasbourg, 2008.
- THIREAU Jean-Louis, « Le comparatisme et la naissance du droit français », *Revue d'histoire des facultés de droit et de la culture juridique, du monde des juristes et du livre juridique*, n° 10-11, 1990, p. 153-191.
- TRANCHANT Mathias (textes réunis par), « Au risque de l'étranger : Le protéger et s'en protéger dans les sociétés littorales de l'Europe atlantique au Moyen Âge et à l'époque moderne », *Annales de Bretagne et des Pays de l'Ouest*, t. 117, n° 1, 2010.
- VANEL Marguerite, *Histoire de la nationalité française d'origine. Évolution historique de la notion de Français d'origine, du XVI^e siècle au Code Civil*, Paris, imprimerie de la Cour d'appel, 1945.
- VILLEY Michel, *La formation de la pensée juridique moderne*, texte établi, révisé et présenté par Stéphane Rials, notes revues par Éric Desmons, Paris, PUF, 2013.
- WELLS Charlotte C., *Law and Citizenship in Early Modern France*, Baltimore/London, Johns Hopkins University Press, 1995.
- YARDENI Myriam, « Antagonismes nationaux et propagande durant les Guerres de Religion », *Revue d'Histoire Moderne et Contemporaine*, 1966, t. 13, n° 4, p. 273-284.
- 阿河雄二郎「オーバン考」『えくす・おりえんて』（大阪外国語大学）7号、2002年。
- 阿河雄二郎「近世前半期フランスの外国人—イタリア人とユダヤ人—」『関西学院史学』第32号、2005年。
- 小山啓子「近世フランスの大市都市リヨンとイタリア人」共生倫理研究会編『共生の人文学：グローバル時代と多様な文化』昭和堂、2007年、215-238頁。
- 小山啓子「16世紀フランスの外国人同教団研究：『リヨンにおけるフィレンチェ同郷団史料集』の分析から」『神戸大学文学部紀要』48号、189-220頁。
- 深沢克己「ヨーロッパ商業空間とディアスポラ」『岩波講座世界歴史』第15巻『商人と市場—ネットワークの中の国家』岩波書店、1999年、181-207頁。
- 渡辺和行『エトランジェのフランス史—国民・移民・外国人』山川出版社、2007年。